



Data

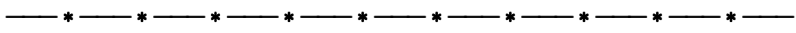
監督・脚本：トニー・ギルロイ

出演：ジェレミー・レナー/レイチ
 エル・ワイズ/エドワード・
 ノートン/アルバート・フィ
 ニー/ジョアン・アレン/ス
 テイシー・キーチ/オスカ
 ー・アイザック/スコット・
 グレン/ドナ・マーフィー/
 マイケル・チャーナス/コリ
 ー・ストール/ニール・ブル
 ックス・カニンガム/ジェリ
 コ・イヴァネク

👁️👁️ みどころ

マット・デイモンのアクションのキレを売りにした『ボーン』3部作は、国家の最高機密にまで迫れるのが最大の魅力だったが、その裏側では何が同時進行していたの？本作が描くそんなストーリーが複雑で難しいのは当然だから、本作前半の理解にはかなりの学習が必要。

しかし、怒涛のカーチェイスと追跡劇が続く後半は、映画本来の楽しさをタツプリと味わいたい。ぐったり疲れることまちがいなしたが、同時に大きな充足感も・・・。



■□より複雑に！より過激に！より屈強に！■□

『ボーン・アイデンティティー』（02年）（『シネマルーム2』120頁参照）、『ボーン・スプレマシー』（04年）、『ボーン・アルティメイタム』（07年）（『シネマルーム16』170頁参照）と続いた『ボーン』シリーズといえば、マット・デイモン。また、『ボーン』シリーズといえば、CIAを中心とするアメリカのスパイたちの暗躍ぶりとアクションのキレが売り物だ。

マット・デイモン扮するジェイソン・ボーンは、CIA極秘プログラム「トレッドストーン計画」によって作り出された最強の暗殺者だが、『ボーン』3部作では彼の暗殺が指令されたり、暗殺されたはずの彼が突如ニューヨークに出現したりと大変だった。他方、エズラ・クレイマー長官（スコット・グレン）の下に「トレッドストーン計画」を進めたCIAは、それをさらにアップグレードした「ブラックプライアー計画」へと歩を進めたうえ、更なる極秘プログラム「アウトカム計画」を遂行しようとしていたから、これまた大変。ところがそんな中、「最高機密、漏洩！」という、とんでもない事態になったため、

機密漏洩によってCIAや国家そのものが危機に陥ることを心配した国家調査研究所のリック・パイヤー（エドワード・ノートン）は、あらゆる証拠隠滅のために全プログラムの抹消を命じることに。しかし、こんな巨大プロジェクトの全抹消がそんなに簡単に遂行できるの？

『ボーン・レガシー』のレガシーとは「過去の遺産」という意味。マット・デイモン扮するジェイソン・ボーンが「トレッドストーン計画」でつくり出された最強の暗殺者なら、本作の主人公であるジェレミー・レナー扮するアロン・クロスは「アウトカム計画」でつくり出された最強の暗殺者。そんなこんなを考えると、『ボーン』シリーズはより複雑に、より過激に、そしてその暗殺者たちはより屈強に！

■この男は雪山で一体ナニを？■

『ボーン』シリーズはアクションのキレと共に大金をかけたロケ撮影が売り（？）だが、本作冒頭から序盤にかけて展開される雪山での撮影を見ているとそのことがよくわかる。高血圧気味の私は朝晩1錠ずつ2種類の薬の服用が欠かせないが、アロンも私と同じように2種類の薬を常用している。さて、これは何の薬？さらにアロンは何度も自分で自分の血液を採取して保存しているが、これって何のため？それよりも何よりも、アロンはこの雪山の中で一体ナニをしているの？ここはアラスカ州にあるCIA訓練基地らしいから、きっとアロンは何らかの訓練を受けているのだろうが、そりゃ一体何の訓練？さらに、雪山の中にポツンと立つ小さな小屋の中でアロンがある男と出会うシークエンスや、その小屋が突如爆破されてしまうシークエンスなどが次々と展開されていくが、こりゃ一体どういう意味？この攻撃を仕掛けたのは一体ダレ？同時並行的に世界の各地でいろんなシークエンスが展開されていくから、それについていくだけで大変だ。

『007』シリーズで初代ジェームズ・ボンド役を演じたのはショーン・コネリー。その後ボンド役は次々と代わり、最新の第21作『007/カジノ・ロワイヤル』（06年）（『シネマールム14』14頁参照）、第22作『007/慰めの報酬』（08年）（『シネマールム22』88頁参照）、第23作『007/スカイフォール』（12年）ではダニエル・クレイグが6代目ボンド役を務めている。それに対して、『ボーン』シリーズ4作目の本作ではジェレミー・レナーがはじめて主役として登場したが、実は私は雪山で活動している男がジェレミー・レナー演ずる「アウトカム計画」が生み出した最高傑作の作業員#5ことアロン・クロスであることがすぐにわからなかった。その最大の理由はアロンが着ぶくれしていたため（？）だが、映画評論家を自称する私でさえこの程度の理解だから、『ボーン』シリーズをちゃんと理解するのは難しい。

■マルタ博士は何の研究を？■

本作ではアロン・クロスと共にレイチェル・ワイズ演ずるマルタ・シェアリング博士が大きな役割を果たすが、ステリシン・モルランタ社に勤務している生体学の権威であるマルタ博士は一体ナニを研究しているの？それが心身共に強靱な人間をつくり出す「アウトカム計画」（人格・肉体改造計画）であることが私にハッキリわかったのは、本作中盤ア

アロンがマルタ博士に接触してくる中で自分の置かれた立場を説明する時だから、私の理解もタカが知れたものだ。したがって、ある日共に研究を続けていた同僚の男が突然銃を乱射し始めるシークエンスについても、実は私はよくわかっていなかったと言わざるを得ない。

同僚たちが次々と射殺される中、機転を利かせたマルタは何とか生き延びることができたが、これを見ているとマルタの研究はかなりヤバそう。国家のため、国民のためと言われればたしかに大義名分は立つが、CIAの「トレッドストーン計画」「ブラックブライアー計画」「アウトカム計画」という計画はホントにそう？原爆を開発したのも国家のため、国民のため、平和のためだったが、さてその現実の使われ方は？そう考えると、マルタが科学者としてステリシン・モルランタ社に雇われて働いていることの是非は？さらに「アウトカム計画」の研究によってアロンのように精神も肉体も強靱な職員をつくり出すことができたとしても、本来の目的に沿ったホントの活用はできているの？

しかして、いったん現実に進められた「アウトカム計画」によって現実につくり出されたアロンのような男は、バイヤーの命令によって「アウトカム計画」を中止し、証拠隠滅のため全プログラムを抹消することになれば、一体どうなるの？



2012年9月28日(金)よりTOHOシネマズ梅田他全国ロードショー
© 2012 Universal Studios. All Rights Reserved.

■□■ 2人の「逃避行」以降は、なるほど、なるほど・・・■□■

以上のように本作前半は映画評論家の私でも理解が難しい。しかし、研究所の銃乱射事件でショック状態にあるマルタに対して更なる危機が迫る中、雪山から復帰したアロンが彼女を救出した後半からは2人の逃避行がメインストーリーとなる。そして、そこから

のストーリーはシンプルだから誰にでも容易に理解できる。棄切れ状態のアーロンと、それを心配するマルタと共にフィリピンのマニラに向かうスリリングな展開と、マニラで展開される迫力あるカーチェイスと追跡劇は見どころ十分だ。

2001年の9・11同時多発テロを指導したとされるオサマ・ビンラディン容疑者を10年がかりで追いつめ射殺したCIAを中心とするアメリカの諜報能力を持ってすれば、アーロンがいつどこでマルタと接触し、どのような経路でフィリピンのマニラに飛んだのか、そしてどこに潜伏しているのかを調べあげるくらいはチョロイもの……。さまざまな情報システムを駆使しながら執拗にアーロンとマルタの行方を追うバイヤーの指揮ぶりを見ているとそれがよくわかるから、近時の情報メカニズムの進歩の程は是非本作で。そこで心配になるのは日本の危機管理能力だが、きっとそこはかきなりお寒いのでは……。

■このカーチェイスとこの追跡劇に脱帽！■

本作注目のアクションは、後半に2つある。第1は、マニラの町を舞台とした激しいカーチェイス。もっとも、近時のド派手なカーチェイスはあまりにもスピードが速すぎるため動体視力の衰えた私は容易についていくことができないが、まさに本作もそれ。『007/慰めの報酬』のカーチェイスはすごかったが、本作はそれよりもさらにすごい。また8月6日に観た『トータル・リコール』（12年）でのホバーカーによるカーチェイスもすごかったが、本作のものすごさを観てしまうと、『トータル・リコール』のそれは屁みたいなもの……？

第2に注目すべきアクションは、新たな「ラークス計画」によって作り出された工作員#3（レイス・オザワ・チャンチェン）によるアーロンとマルタの追跡劇だ。まずは入り組んだマニラの市街地の屋根の上を飛び回り、狭い路地を走り回るアーロンと#3の追跡劇に注目だが、ここでは手に汗を握ることになること請け合い。続いてバイクでの追跡劇に変化する。ここではどう見てもマルタを後部座席に乗せているアーロンの方が不利だと思うのだが、2人で協力し合えることを考えると、必ずしもそうではない面もあるようだ。レイチェル・ワイズは何と言ってもアカデミー賞助演女優賞を受賞した『ナイロビの蜂』（05年）での熱演が光っていた（『シネマルーム11』285頁参照）が、意外にもこんなアクションをこなせることを本作で実証。

ド派手なアクションを売りものにするハリウッド映画には見飽きている私だが、本作のクライマックスで展開されるこの2つの怒涛のアクションには脱帽！やはり映画は単純に興奮し楽しむことができれば、それでいいのかも……。

2012（平成24）年8月11日記